

しかし大人には体にしみ込んだ歴史の年輪は簡単に消えなかった。

ついでに少し脇道に逸れるが、確か昭和六十年代としますが、その年は八月二十日を過ぎても稲の開花が終らない。たまにたま田圃の見廻りに来ていた隣の主人（大正始め生れ）に、今年の稲作はどうもうまくないようだと話したら、いやまだ大丈夫だよ、今年は九月に閏月があるからとの話に私は旧暦と稲作とは、ほとんど関係ないと思っている世代の一員であるから、信じる事ができなかった記憶があり、なぜ、どうしての疑問符が残るだけであった。だが隣の田圃の主人にとっては、旧暦に依って生きてきた、頭の回転はそれしか選択し得なかったのであろう。それはごく自然に自分なりに当てはめてきた智恵の披露にすぎなかったのかもしれない。その年の出来秋は平年作をちよつと下った程度でした。

話は前にもどるが、昭和三十年後半には、東京オリンピックが開催され、農家の機械化が進み、それにつれて、オリンピックの前後から出稼人口も急増した。出稼が急増したことにより、盆、正月の一時帰郷による関係からごく自然に新暦に切換えられたのであった。その間には、新生活運動とか、台所改善、カッチャ九時就寝運動とか、いろいろなことが提起され、それぞれの新しい構図が計られ、もうそうなる受動的ながら旧暦はだんだんと忘れられ、今日では生活のなかから完全に忘れ去

ざり明ると云えるのである。一日、二日でも晴れてあれば星明りということもあるが、足元が暗く闇夜であると云っても過言ではない。

本能寺の変と云われる原因については、昔からさまざまな説が提起されている。古くは怨恨説、野望説が主流で、最近では内通説、絶望説となえている人もいる。怨恨説、野望説は史料的には信憑性はほとんどないという。

内通説は光秀が朝廷と手を組んで、信長が高い位、征夷大將軍になることを阻止するために殺したということが、有力な説になってきている。

この信長將軍任官とともに、秀吉に追い越される不安と焦りから、何らかの心身症に罹っての行動ともとられている。

光秀の三日天下という言葉があるが、光秀が信長を倒す、秀吉が備中高松城を水攻めにしてしたが、光秀の密書をもった男が、毛利方の小早川隆景に届けるべきところ、間違つて秀吉の陣内にまぎれこみ捕えられて密書の内容が秀吉に知られたことが光秀には悲劇であったのだ。

歴史にはもしもとの言葉は許されないけれども、この密書が小早川方に真直に届いていれば、日本の歴史の足跡が違った方向に流れたかも知れないのである。

赤穂浪士の討入れは、五万石の城主、浅野内匠頭長矩が江戸城内の松の大廊下において高家吉良上野義央に、刀を抜いて斬

られてしまった。

旧暦はもう必要ないものでしょうか。生活の重要な位置からは、はじかれても付録ながら、利用されることはない。それではここにきて暦について一つ問題を出してみよう。

戦国時代のことですが、織田信長が、京都の本能寺において、家臣明智光秀の謀反によって倒された、天正十年（一五八二）六月一日の夜は、明るかったか、それとも暗かったか、また赤穂浪士が、吉良上野介義央邸に討入れた元禄十五年（一七〇二）十二月十四日の夜は、明るかったか、それとも暗かったかと問われれば、昔の人は即座に答えられた。

ところが今の人はハテ：と考えながらそんなことは天気の状態が、わからないかぎり答えようがないじゃないかと云うに違いない。旧暦を知り、それを聞いた昔の人にしてみれば、こんな簡単な質問はやめてくれ、馬鹿にするなどおこるかもしれない。

答えは織田信長が殺された晩（正確には二日未明）は闇夜である。

また赤穂浪士の討入れの晩は雲がなければ明るかった。

旧暦は月の満ち欠けをもとにしたものだから、一日、二日の夜は雲があろうが、なかりうが闇夜で三日目でやっと三ヶ月と云われる月が、視界に入ってくるのである。

また十四日は満月の前の日だから、眞黒な雲に覆われないか

りつけ屑間などを傷つけたことから始まった。

ちなみに高家とは江戸幕府の職名の一つで、室町時代以来の武家の名門が任じられ、朝廷への使節や、伊勢神宮、日光東照宮への代参、並びに勅使、公卿（朝廷に仕えた上級貴族）の接待や、儀式、典礼を管掌する家柄で、吉良家を含めて二十六家がある。

義央はことに指南役の立場にあり、高慢な態度を示す性格であった。長矩が恨み心頭に達した所業とは云え、殿中内での抜刀などはともない法度で長矩には即日切腹を命じ、義央には罪なく傷の養生にとめよと達せられた。

その日の夜、田村左京大夫の邸に預けられていた浅野内匠頭長矩は大目付の命、かつ検死のもとに庭の上で切腹した。そのあとのことは浅野家の家老役、大石良雄の行動は、よく知られている通りで、そもその発端は勅使の接待における御馳走役のことであるが、根はもっと深かった。

戦乱の時代は終り、良い役職にいたり、抜擢を望めば当然賄賂に頼らざるを得なかった。出世競争を勝ち抜き賄賂の贈りものとして一般的だったのは、干鯛と氷砂糖だったという。干鯛と氷砂糖が特に貴重品というわけではないが、上げ底にした箱の底の部分に、干鯛であれば、「その下に小判が入っています」と「また氷砂糖であれば「その下に白銀が入っていますよ」という暗号であったというわけである。

浅野長矩が、接待役の指導にあたる、吉良義央への贈り物の

少なさや塩の問題もありますが、その背景にある世相は、大公方といわれた將軍綱吉、その側用人柳沢、庶民の絶大なる信仰を集めている護持院の大僧正たる隆光らの横暴と悪政、綱吉は臣下の私邸にお成になるのはよいとしても、その夫人や息女に懸想したり、家来の妻妾に手を出したりということは若い長矩には小藩の殿様とは云え考えられないことである。

江戸市民には、幾度となく奢侈禁止の令を出しながら、自らは榮耀榮華をほしいますの日常であるから、幕府の財政は窮迫し、それを凌ぐに貨幣改悪の鑄造を行なった。

それは今まで使用して来た慶長小判（純金の割合が八割五分）と元禄小判（純金の割合が五割五分）との交換である。交換レートは、旧貨一〇〇兩にたいして、新貨一〇一兩で、この兌換率はだれがみてもわかるように幕府にとっては約三割の儲けにあたる。

長矩にしても、あれや、これやで割り切れない屈折の気持ちから恨みと化して直情がおもむくままに抜刀にいたったのではな

いだろうか。
ただ吉良の強欲うんぬんと責めるよりも、浅野家にも問題があるかもしれない。勅使接待は前にも一度あったのだ。その経験を掘り起こして自助努力を重ねたら何とか違った結果があったのかもしれない。

ところで当時の朝廷は何で生きながらえていたのだろうか、ちよっと不思議に思って調べてみたら、幕府から十万石分の領

一日ごろ、上弦は八日ごろ、満月は十五日ごろ、下弦は二十二日ごろになっている。

だから昔の暦では、月が三ヵ月目ごろから見え始め、十五日で満月になり、又欠けていき月の終りには見えなくなる。そして又新しい月が始まる。この周期は二十九、五三〇八九日ではぼ三十日である。

旧暦は大の月（三十日）小の月（二十九日）を交互に入れて、太陽暦との誤差（一年で約十一日、三年で三十三日）は閏月として数年ごとに暦に入れる。だから例えば普通の月の五月と閏五月と五月がふた月続くのだ。

三ヵ月目で始めて私達の肉眼で見えるようになり、十五日で満月になる。この状態を（望）という。満月のことを望月というのはここからきている。

藤原道長が権勢をほしいますに詠んだ歌に「此の世をば我が世とぞ思ふ望月のかけたることも無しと思へば」の望月だ。望月が欠けることないと威張りつくしても、自然界はそうはいかない。満月から月は段々と欠けて行き、十五日たちと完全に見えなくなる。この状態を「晦」という。この「晦」をみそかと読むのである。

晦は一ヵ月の最終日で、次の日は一ヵ月の開始日であることを「朔」という。月の終りが晦で月の始めが朔（一日）と覚えておいていいのだ。月が〇の状態から、上弦、満月、下弦、そし

地を与えられていたのである。十万石と云えばちょうど津輕藩の石高と似ていて朝廷と云えども財政上はそんなに豊かではなかったろう。

どうも脇道にそれてしまった。

討入れの日は旧暦の十二月十四日でありますから、旧暦は新暦にたいしてたいいてい月遅れになっていますが、今年平成十一年に当てはめてみますと、旧正月が四十六日遅れの二月十六日である。元禄十五年十二月一日になぞらいてみれば、大の月がふた月続いたとして、討入れの日は、今の一月三十一日にあたる。新暦の十二月十四日ではいかに東京でも、当時小氷河期にあたるとしても雪は降らないだろう。

今の子供達は陰暦十二月十四日で雪が降っていたと、ドラマで見ても旧暦そのものが、知識のなかにないものだから、十二月十四日には東京では雪は降らない、ウソだ——と観ているかもしれない。今の一月末頃と云えば東京でも降雪は当り前で納得できるだ。

旧暦は中国から輸入され、わが国で改良され、こちらの地方では戦後まで利用されて来たが、中国では春秋時代（紀元前）すでに用いられ、月の周期も知っていたと云われている。月の満ち欠けの周期は変化するから、新月の日が旧暦の一日になるように配置する方法を（定朔法）と云って、太陰暦では新月が

て〇にもどる期間を一朔望月と呼ぶのだそうである。

くり返すようだが、旧暦では大の月が六ヵ月で三〇×六は一八〇日、小の月六ヵ月で、二十九×六は一七四日で合せて三五四日、太陽年にくらべ十一日も短かく、月の名称と季節とは一致しない。旧暦は一朔望月が十二回あって一年になる。私達の住んでいる地球は三六五・二四二二日で太陽を一周する。太陽も公転する。太陽が公転する道は黄道という。

ややこしいことはやめにして、月の満ち欠けはどうして起るかといえば、それは、太陽、月、地球という天体の動きによって起こるのだ。

月と太陽が、地球から見て東西に同方向の時、地球からは月が見えない。これが朔である。それでは月と太陽が南北に同方向、つまり太陽の前に月がふさがればどうなるかといえば日食が起こるのだ。だから日食は必ず朔の日に起こる。

旧暦は定朔法を用いているから朔の日、一日に起こる。逆に考えればどこかで日食があると云えば、それは何月かはわからないが旧暦の一日なのである。

気をつけていたら、一昨年の三月九日モングルに於て皆既日食が起き日本からも観測陣が出動しましたが、その日も旧暦の一日であった。

月食は月が地球の影に入る現象だから旧暦では、必ず望の日に起こる。望とは満月十五日のことである。一日に月食が起き、

満月(十五日)に日食が起るといふことだ。だがこう書いてくると毎月、日食、月食が見られるように感じられるが実はそうではない。太陽の通る黄道と、月の通る白道とが五度九分、傾いているためで、黄道と白道の交点の近くで、新月、満月になれば、日食、月食が起るそうである。

ただひとつ注意しなければならぬのは、満月と十五日とは一致しないということも念頭においてもらいたい。それは朔は定朔法では必ず一日になるが、厳密に云えば朔になることは一日いっばいのことでなく瞬時のことだからである。

一日のうちでも朔になる現象は瞬時のことだから、午前〇時三十秒の時もあれば、午後十一時五十九分に朔になることもあるからである。

西暦二〇〇〇年、つまり来年の仲秋の名月、旧暦八月十五日は残年ながら満月にはならない。十五日から二日遅れて満月になるそうです。朔から望までは平均十四、七六五日間であり、実際はこの平均値に数パーセントを加減した日数の経過で望になると云われています。

|| ま と め ||

始めにかえって潮汐のことでもう一度考えてみよう。

万有引力のことは、ほとんどの人が知っていると思うが、文字どおりすべての物体の間に働く引力である。紅灯の巷に咲くあやしげな御婦人の引力に敗けたなんていう、うそぶく人もあるかも知れないが、地上での二つの物体に働く引力は、非常

に小さく問題にならないという。

物体が大なれば、引力も大きい、地球が受ける引力は太陽と月が主だが、太陽の半径は地球の一〇九倍、月の半径の四〇〇倍もありますが、太陽は月にくらべてあまりにも遠いため、引力が弱く、月は太陽に比べて地球に及ぼす力は二、一八倍あるという。

潮の干満の起潮力は月が太陽より大きい。太陽と月が東西に同方向にある時、日食が起きるが、東西に同方向とは朔であり、月もいっばいの力で引張っているのに月の後から太陽も引張っていましたから、朔の日、つまり旧暦一日に大潮になるのだ。南北に同方向になれば望になるが、これも朔と同じ理由で大潮になる。だから海へ出かけて、貝藻類を採るには旧暦の一日と十五日が適当と考えられる。それでは今までのことを簡単にまとめてみれば、

一、日食が起きるのは、新月であり、朔であり旧暦の一日である。

一、月食が起きるのは、満月であり、望であり、だいたい旧暦の十五日である。

一、大潮になるのは新月であり、満月であり、旧暦の一日であり、だいたい十五日である。

以上をもって私はこれからは旧暦も大事にとり扱って行きたいと思っています。

高砂ヤーと ナンマイダー

ものがたり

秋 元 惣之進



見合いから祝言まで

私は戦后間もなく、親戚の祝言の「宰領道具の責任者」を務めた事があるので、見合から祝言までの経過を追憶しながら綴って見た。

息子が一人前に成長し、年頃になると親は「嫁」の心配をして支度に取りかかる。嫁を貰っても狭い家では新婚が寝る「寝床コブ」を増築する。

或る日、知り合いの人が遊びに来て嫁話となり、父母は息子に嫁を世話してくれと知り合いの人に頼むが、知り合いの人は嫁貰うなら「親」貰えと言ひ、他村だが某家に良い嫁が有り両親は「賢しこいしサカシイ」し、娘も綺麗で「賢しこい

II 決め酒 II

娘の親は簡単に娘をくるとは言わない。娘の親は「婿の村」に「コッソリ」と行き、婿の近所の家で婿の普段の素行や「マギ血統」財産、生活の度合いなど聞くが教えた家で婿の家の事を少しでも悪く言つて破談になると「差しサス」入れられたと言つた。

世話人は一〜二回で縁談が決まらないので二〜三回も娘の家に行つて法羅も混ぜ混ぜて弁を振うが、世話人に持たせてやつた箱菓子も娘の家でまだ返して無いので再び娘の家に行き、世話人は今日は天気も良いし「美味しい決め酒を呑ませう」と言ふと娘の親は「シブシブ」返事をして「決め酒」を呑み、双方共、談笑しながら結納の日取りなど決める。

結納の日は娘の家では二〜三日前から、お膳の支度やら何にやらで忙しく「テンテコ舞い」である。

嫁を貰つた婿の家でも数日前から「嫁に掛ける紋付やら其の他の買物で目が回る程の忙しさである。

II 結納 II

愈々、結納の日が来た、婿側の方でも朝から忙しい。嫁に掛ける品物や其の他の物を落度なく荷車に付ける。荷車には世話人や父母、樽背負いなどが乗り、樽には「スルメ、昆布」が付けれ酒二升が入つて居る。

宴に入り、馬子達は泥酔して唄の二つ三つも歌つて居る間に請目録が手渡され道具付け一同は歸り支度をして出口に出ると「タッハン」歸りぎはの盃」一杯と勧められて家路に向ふ。

II 祝言 II

娘の家では髪結いが嫁の出発の為に化粧やら角隠しに夢中で一生に一度の晴れ姿も漸く整い終つて座敷の真中に嫁と仲人、付添と亭主役が案内して座らせ其の後に親戚、縁者のお客様を座らせて祝宴に入り酒を呑み交す。お客様は次第にはろ酔い気嫌で唄や踊りの最中で賑わうが「ぼつぼつ」嫁の出発時間が来た。花嫁は仲人の妻に手を引かれ荷車に乗るが花嫁一同は両親や皆んなに見送られ出発する。昔の悪かつた「デコボコ」の道路を荷車に揺られながら婿側の村近くまでくると樽背負いは荷車から降りて大きい声で「嫁行くでアー」と声高らかに数拾回も叫ぶと嫁を「ひと目」見ようと婦女子等が嫁の乗った荷車の後に付いてくる。

当時は嫁の乗った荷車と、嫁の道具付の歸りの荷車が途中で行き合う習慣があった。婿方の家の近くまで花嫁の荷車が来ると手伝の若者が二〜三人で堤灯を付けて「近迎えに来ていた」嫁の荷車が婿の家に着く頃は薄暗くなって居る。嫁が荷車から降りる頃は隣近所の人々は嫁を一目見ようと大勢集つて居るのが当時の光景であつた。

嫁は仲人の妻に手を引かれ静かに荷車から降りて「入口の土

荷車は娘の家に着き結納品を荷車から下して家の中で結納品を開いて並べる。世話人と婿側の父母は一礼してから「横座」に座つて居る本家の主人らしい人に目録を渡すと、本家の主人は結納品と目録を見て落度が無いか確認して初めて双方共に飲談して居るが娘の家では前日から用意してあるお膳とお酒を運んでくる。双方共、飲談中に「結婚式の日取り」など決めて請目録を貰つて居る内に酔が回り時間が来たので仲人一同は荷車に乗つて帰宅する。

II 道具付け II

愈々 祝言の日が来た。祝言には両家で二〜三日前から親戚や隣近所の人達の手伝人で忙しい。嫁側では荷車に簞笥、長持、其の他の道具を積む。道具付けには「宰領」が付き紋付、袴、マント姿で行く。樽背負、馬子は祥天に豆絞りの手拭を鉢巻き姿で出発する。道具付は婿側の家に着くと婿側の方では道具付けが来たと手伝人の若物達が道具を家の中に入れて座敷の中に飾る。

婿方の亭主役は横座に座つて居る。道具付けの「宰領」は姿勢を正して「末広」を前に一礼し「此の度はご両家お目出とう御座います」と一礼すると婿側の亭主役も遠い所ご苦勞様でしたと言ひ交す。亭主役は目録を開き一品一品に目録の品目を見て比べ終ると「宰領や道具付一同」に亭主役は「サーサー」ご一同、らくに跣坐をかいてと談笑して居るとお膳が配られ祝

間「トロジ」で軽く盃を交す。亭主役の合図で配膳となりお客様は席に着き、婿と嫁は座敷の真中に座り其の両側に仲人夫妻と付添が座る。其の後、男蝶雌蝶が正式に三三九度の盃をくみかわす。当時は婿と嫁のお酌回りがあり「添い婿無二の親友」も花婿に添いとお客さま一人一人にお酌する習慣があつた。

祝宴は最高潮になり、唄や踊り各自の芸の出し合いで大賑わいで夜の拾二時まで騒いで居つた。お客様は歸りには当時「代物」スルモノ「ウンペ」と言ふ菓子があり手土産に持たせた。

祝言に招待された家では手土産の「スルモノ」ウンペ菓子」を必ず親戚、又、隣家に分けて持つて行つた。

当時は祝言の次の日「後フキ」二日目の祝宴」と言つて婿の友人や知人を招き二日目の祝宴で大賑わいだった。「三日目」は親戚や隣近所の手伝人の「床起し」で唄あり踊りあり隠し芸、取つて置き余興が出て天井が飛ぶ様な爆笑と拍手で賑わつた。当時の祝言のお膳は多少の肴(魚)と野菜料理に「ウドン」のお汁が精一杯のご馳走で濁酒の澄んだ呑み物だけで農家は質素儉約をした。其れでも娯楽の少ない農家は祝言は最大の喜びで賑わつた。

戦後は恋愛結婚が大流行だが、戦前迄は相思相愛の恋愛結婚は両親が嫌い世間でも、あそこの息子は好き連れで「好き連れ泣き連れ」と陰で悪評があつた。又、昔の唄にも「二度と惚れるな他村の人には末は烏の泣き別れ」と言ふ唄があつた。

戦前、戦后と違い今は祝言の式場でも高級「ホテル」で催され一流映画俳優か大臣様の様な結婚式で華麗である。

町当局は式場を無駄の無い公民館を使用しようと呼んでいるが、反面、今度は夫婦二人で招待される「ケース」があり全ったく無駄だと思ふ。

茶毘(火葬)と葬儀

人の一生は、山あり、谷あり、重荷を背負って喜怒哀楽の人生を歩むが結婚は人生の墓場と言う。暮して行く先は長いが暮した後は老いても気持は若い光陰矢の如し「アツト」言う間に老い先は短くなり、何れ此の世から姿を消すが、戦后迄の茶毘(火葬)と葬儀に付いて体験した事や、小さい頃から仏事に付いて村人から口伝えに聞いた話を綴る。

× × × × × × × × × × × ×

嘉瀬にはお寺が仲良く二軒並んで建って居る。私の家は、お寺の近くにあったので「葬儀Ⅱダビ」があると、お寺の僧侶の鳴らす大きな「飯」と婆様達が鳴らす小さな飯が遠くまで聞こえるのですぐ分る。私等、子供の頃は他家の不幸も知らず友達にお寺で飯が鳴って居る「ダミⅡ葬式」があるんだ、お菓子を貰いに行こうと友達を誘って行くと「ダミⅡ葬儀」を送葬して居る親戚の人は子供達に「ダミ」の菓子を喰べると虫歯にならないと言ってお菓子をくれたものだった。

唱えて居るが哀れで悲しかった。お寺で和尚様のお経も終り「火葬場」に行くが、昔は「薪」を積んで其の上に棺桶(死者)を上げて火葬したが其れ以前は土葬もあった。

火葬場まで見送った人達は帰ってくると玄関先きに手を洗う塩水と木の炭と清い水が用意されて手を洗う習慣が今も残って居る。法事は次の日に行なわれ、お膳は一切の精進料理で特に遺族は親か子が亡くなると「四九日間」は魚介類は一切喰べず、風呂にも入らず、散髪も禁じ髭も剃らず、忌明けまで精進した。

茶毘(火で焼く)

時代の流れとは言い、今の「ダミ」は通夜の祭壇(サイダラン)を見ても高価な生花の花輪、盛籠、造花の花輪、回転灯籠、金びかの蠟燭(ロウソク)、其の他の供物があのお寺の本堂から一杯に溢れ、お寺の庭先までも所狭しと並べられ、供物を供える人も自から義理か見栄を張って居ると思ふがまるで「ショウ」の様で、偉い様か大臣の「ダミ」の様な豪華さであると思ふ。

法事のお膳を見ても、昔は夢にも思わぬ考えられなかった肉料理、各種の魚介類、其の他の皿が山盛りに飾られお膳から溢れて居る。呑物もビール、ウィスキー、清酒、色々な「ジュース」類が盛沢山に見られ豪華なものである。

又、和尚様にお布施(ヒシ)を上げておるのに一部の和尚様は人の不孝も(特に若い人や長期入院で死亡)振り返らず、自ずから肉、

私等、子供の頃はお菓子は普段あまり喰べられなかったが「ダミ」のお菓子は大抵が粉菓子か味噌パンで珍らしく美味しかった。

× × × × × × × × × × × ×

私達が小さい頃は茶毘(火葬Ⅱ葬式)を「ダミ」と言って招待のお使いは必ず二人で出掛け知らせたが、当時は電話も自転車も珍らしく他村に親戚があると何処迄も二人で歩いて招待のお使いをしたが余りにも遠い親戚だと電報で知らせた。

仏様を飾る当時の祭壇は普通の家では「机」の様な物を一ツか二ツ位並べた至って粗末で質素な物でした。昔の供物は招待があつた親戚でも箱菓子と線香、其の上に僅少の香典を供える最高の心尽しであるが、隣近所や友人等は葬儀の家に「豆腐の五ノ六丁、又、「ハルサメ」「ユバ」「コンニャク」野菜類を供げると最高の心尽しであった。

当時は「仏様Ⅱ死者」の両側に「四(死)花」に金色と白色の蓮華の造花があるだけの寂しさで庭先から採った花が飾られて居る位であった。

仏様Ⅱ死者を棺桶に入れながら和尚様のお経も終り出棺するが、昔は棺桶に仏様(死者)を入れてさらに棺桶(死者)を輿(ミコシ)を前後に四人で担ぎ白い布の網を引き、葬列者が村の道角(ミヅカド)を曲がる時には僧侶が大きな「飯」を鳴らしお寺に着くと「ガンドグ」を置いて親戚や招待された人達は「興Ⅱガンドグ」を左から三回Ⅱ廻り焼香をする。婆様達は端側で飯を鳴らして念仏を

魚介類、鶏の「股」を口一杯に嚙り、ビール、ウィスキーなど呑んで居るのが見受けられる。

日本は仏教国であると言つ

「お盆が来たが吾が親でない、お盆の「ミソハギ」吾が親だ。」「お盆には仏様達があつた世から吾が家にくると言うが、お盆が過ぎると、又、あの世に帰って行くとと言うが歸る時の三途の川は霊で一杯になり混雑ぶりは大変だと思ふ。仏様を手厚くするのが日本人の特徴で、お尚様に高いお金を上げると位(クラ)の高い戒名が付けて貰はれると言うが矛盾して居ると思ふ。

特に高いお金を出して和尚様に付けて貰う「戒名は死者に必要か、俗名でも良いが大居士、居士、信士と「ランクⅡ格付」があるが「戒名」に値段を付けるのは疑問である。

又、時代は除々に変つて居るが、今、大抵の著名人は自然葬の一つとして遺骨を細かく砕いて山、海、川に散骨して居り会葬で無く近親者だけで葬儀をする事新しくて度々見て居る。

「大金を払って葬式をした後、唯でもお金の事はあまり言いたく無いが、またもや一回忌、三回忌、何回忌と大金を使い、死とお金が引つ付いている。墓は何時か先は存在しないだろう。」(大阪女子大、こめや ふみ子)

「お寺さんのサービス過剰を嘆いて居るが「只のサービス」なら良いが、高々のお金さえ出すと殿様級の院殿大居士、又、